

# 春城劄記

四

明治卅七年四月

今死せしむる  
西洋の風を  
文人の意を  
名傳の流  
此の又手  
所は略す

特別  
イ4  
1919  
187



○百葉塔と初創

此は稱徳寺にありて

願つて傳つる百葉塔と初創を千二入れたと  
 け添井との雜り初創の蓮南うを井との  
 自らてあるうしてある、けく井との花什  
 と二品あり千二入れたのと傳つてうと増えりとい  
 へる

百葉塔のことと記してありて、けく  
 初創のこととありて又ある、蓮南うと西夏初  
 創とあり、この初創の柄は夏乾定云々と年々











恙きらくあまの命と床や読書の可を仰ち  
えん也。えんは余由とローズベリー卿が、石代  
亭主の一人の言へり。其言を讀みんことを  
讀みしは起る。卿は回く凡そベッド、パツシ  
もいふこと。其後山やの最貴きものといふ  
枕を倚ひて坐し、その言をきけん。是は又その  
仙麻睡薬をいふこと。あまの趣をその  
讀みんことを悦樂とせし。健康を獲やけん  
也。爾は眠るを萌し、あまの趣の事と  
し。その言をきき、其を枕し、其樂をいふ。即  
ちあまの睡眠の表を遺ふ。ふけん也。

このすゑちの昇の二問題とて倫敦デリー  
ーメンの如きおろし。醫者昇の意見と敵しつ  
ち。この二を根として、医者の言を容れ、その危  
険なる議論とせん。之を批難し、此床に後者  
する。その言を容れ、其言を容れ、その言を  
と。医者の言を容れ、其言を容れ、その言を  
け。その言を容れ、其言を容れ、その言を  
と。論定する。此中、視力を言ふこと。その論  
の、その言を容れ、其言を容れ、その言を  
デリーーメンの言を容れ、其言を容れ、その言を  
パツシの言を容れ、其言を容れ、その言を



印刷  
正楷の字を法を

重宝  
十二オンスより十六オンス(5)

六寸半

幅  
五寸

天  
四令の三

地 一吋四分の三

あ側のまのの一吋四分の二

印刷本の紙を縦四寸横二寸四分の三

え来床中へ書を讀むの癖を獨り英朱を以て  
いふ有る特異の習俗也佛國を以て

東秦書院

床中ニ寝あぐり被ふとアングロサリソンのよ  
うには思へき習癖を改む即ち沐浴や  
古も改むこと也英米あふ人とまゝく温湯に  
沐浴をせしむるを冷めやうとあつては漢書  
さういふことを論のこととて改む佛人の温  
湯也英人といふこのあつてもあつたや  
んと佛人といふ佛人といふ浴桶をいふや  
漢書を哲的の書やと讀みつゝとて漢書が  
後あつてと即ち然也吾人も万里の一角  
店を於てハッス、ブツリ」の一店ををて  
こゝにありていふこゝに物ぬる湯のおおとのめ



○清き天上を流るる水は、其の源に  
又其の清流の源を求む、其の源の  
風言と常々も味あるを云ふ。然るに此の  
意匠の遷り換へしを見るべし。此の  
材料必要なること、仍てこゝにおちて



今死せば

無期息災の人にして、死亡の譏報傳はるときは、其の人必らず長壽なるは、俗説の保証するところ、是に於て乎、諸名士の長壽を祈らんと爲め、此戯文を掲ぐと云爾

如<sup>に</sup>露<sup>る</sup>碑<sup>い</sup>  
如<sup>に</sup>面<sup>めん</sup>  
電<sup>でん</sup>の辭<sup>じ</sup>  
世<sup>せい</sup>

でんく太鼓の  
打おさめ

如電入道、姓の大槻名の修二、團扇又白  
餘坊と號す、盤溪先生の嫡嗣なり、博覽



強記にして考證に精しく、詩歌文章を能くし、雜劇俗曲の類に至るまで知らざる處無し、蓋し其母芋を食ひ過ぎて寝ね、章魚に吸ひ付れたる夢を見て孕み、遂に翁を生じ、故に手も八挺、口も八挺、のらくらとして一生を踊り暮すもの、章魚の八本脚にて海中にふらつくが如し、又好んで法華經八卷を講ずるも是が爲めなり、其狀貌の章魚入道に似たる何ぞ怪むに足らん、云々、

翁の死因に就て一説を傳ふる者あり曰く、翁例の好事より、古真曾と云へるを發企し、説を爲して云ふ古代漁獵の法未だ備ひらざるや、蟲類を捕へて食す、特に螻蛄、蜚蠊、の美味なり、今日と雖も東奥山間の民、蜚蠊を山蛸と稱して之を食ふ、其人を殺すの毒ありと云ふの訛りなりと、會員を招きて蜚蠊の羹を供す、一人も箸を取る者無く、翁獨り之を食して病を獲、幾くならずして計報を聞くに至る、其眞偽を知らず、會葬者の翁の遺言により、和漢古今人物の扮





CHARLES SCRIBNER'S SONS  
Publishers :: :: New York City.

*I herewith enclose 25 cents for Three Months subscription to THE LAMP according to your special offer.*



PAT'D APRIL 30, 1901 THE WINTHROP PRESS MFRS. NEW YORK

装を爲すべしとて、三尺餘の附巾儼めしく、青龍刀を擔ぐ關羽あり、七つ道具を背負つて、坊主頭を振り立てる辨慶あり、瘦せて蟋蟀に似たる詩人の屈原に扮し、肥えて腰の如き和尚の布袋となり、女の鎧を着たる巴板額、彌彌姿の高尾八橋、加藤清正に手を引かるゝ小野小町、彌次郎喜多八に腰を挿さるゝ楊貴妃等、棺の左右前後を取圍み、其面白き限り無く、流石の如電入道の葬式なりとて、感せぬものいなかよしと。

大  
の  
誰  
？

予は旅の度々をくも、予は其旅の  
 子を凡そ四分一、大に旅の揮毫画に流  
 ち、其筆は小さいが、其心は偉大なり。予  
 かと其心、其心をくも、其心をくも、其  
 心をくも、其心をくも、其心をくも、其







とうとう坊主の出ひや、ふせあぐねおめせ  
 家の床より佛画を掛け佛衣と書き木魚  
 梵鐘の音を流しあつて、室を日暮る  
 心もなまぬあふのあふあふのあふ  
 ひとこやう福味あつて北風の料理  
 ときやうとて、さうとて、さうとて、さうとて  
 けは、腰掛をつけて、茶の肥太  
 傍に、一〇分、さうとて、さうとて、さうとて  
 とさがつて、飯蒸湯、要、さうとて、さうとて

東林堂

へんか僧を退き、聴て五六往の料理を鉢  
 へんかを造る、おろし茶、早よ、早よ  
 ち、料理を、白く、湯茶と、茶の煮、みつ茶の  
 ひ、白く、湯茶と、茶の煮、みつ茶の  
 く、野菜の天麩、蓮根の酢つけ、さ  
 う、誰んの家、おろし茶、早よ、早よ  
 れ、おろし茶、早よ、早よ、早よ、早よ  
 の、おろし茶、早よ、早よ、早よ、早よ  
 的、おろし茶、早よ、早よ、早よ、早よ  
 〜〜〜〜、おろし茶、早よ、早よ、早よ、早よ  
 改、おろし茶、早よ、早よ、早よ、早よ







抑此印のかく多、數存在するは如何といふに、此銅印や純然たる糸印の一にして、當時輸入したる此銅印に、關白並に壽詞あるを以て、或は秀吉公の取りて假用し給ひしこともあるべけれど、太閤の故らに鑄造せしめ給ひしものにはあらず。思ふに關白の字より後來何れも太閤の印と誤り傳へしなるへし、元より糸印なれば多く世に存するは怪しむに足らずといふへし。附て云ふ近頃某處に於て東山義政公(天山)の山水畫幅を見る、其右方上部の餘白に此印の捺しあるを見たり。尙前記の他、該印の所有者並に捺印の文書等見聞の方々は、報導の勞を惜しみ給ふことなかれ。

◎昔の文人墨客の名の由来を述べて見ても  
一冊である、上掲圖うま徳馬所の花は花屋の  
あつたところ、花屋の飯屋と云い馬馬が  
大工の棟梁にあつたところ、自ら別名を  
撰ぶに野△

東素堂

見のとうゆきとひ、享傳日こう名の傳  
と其の伝をし地の京橋さうしとを今依  
してさうなつけれとさう傳をいつてさう  
さう、左の教人の雅師の由来をいま  
地知らるるに

一十返金一入 細糸をすゆきなりと  
ひしきもいふのきうき固く一丸といひ  
一丸き固く十返金と  
きなりと

一 恋川其所 本名を倉橋其子とい  
 けふあふ守の匠とてあり其所  
 と傳へて即ち恋川ユイシ川、其所



ハナタケの略さくし

一 柳青 若草をぬきむき白の跡を編

し草葉如洲の跡を此のそと

一 甘毛 八丁四方を白しける時

其地の名物ししはみつけし

しん

一 吾子角 ハナタケ金鼓角と云い

鼓鼓の角の意ししは後物を鑑

金大鼓和あつてししは今年易傳授あ

り夫れししは唱其角、易に止吾上人、

吾其角ししは云々と螺定遺行し

見えし

一曲亭馬琴 曲亭とて漢書と云い山

の名馬琴とて野相公の才非馬卿琴

未能しししをとりししは馬琴

の自筆のやまはるる見えししは

◎本邦の紙の歴史 今も昔も本邦は

紙の歴史を編むるはるるはるるはるる

しし材料を甚めししは其の語を新し

しししししししししししししししし

載するはるるをせしししししししし



めし材料を悉く有伊藤忠六から手紙出  
るるものありしを私に在り編輯し終る  
しそつと云ふは授けし略史を綴るの意  
の誤りなりと掲げざるを以て、頃者及  
ちを換へて圓を以て通し、此の略  
史の切實を得るべく、新史の時代は  
勢如の傳へたるを、これを以て之とす、  
思ふに傳へたるの歴史を、海を隔てて  
とるる取らざるは、多分の事を得  
を得ん歟、

明治二十七年四月十号

東林堂

# 本邦新聞紙の歴史

緒言

浪江の源に浮ぶ可し、楚に入るに及んで、舟船に  
あらざる可からず、現代我國の文運は、古來  
未曾有の隆盛を極め、其進歩の神速ある殆んど世界  
の文運に向て、一大新現象を加へざるものと云ふ  
て可なり、然れどもこれ僅に三四十一年間に起りたる  
出来事にして、其以前に溯りて之を回顧すれば、一  
般の事々物々悉く別天地にあるものゝ如く、今日  
にあつては到底夢想も及ばざる所のものあり、勿  
論斯の如き社會進化の一大氣運にして、人力の敢  
て如何とも爲し能はざる所ありと雖も、この氣運に  
順ひての潮流と導き、以て今日に至らしめざる所以  
のもの、内外人民の動作亦大に與て力あるべし  
あらざるあり、然り而して新聞紙の如き、其最も  
有力なる動力と云ふて不可あかるべきか  
新聞紙の社會の鏡面あり、故に正面より見れば明か  
に一社會文明の程度と反射するものあり、然れども  
さう一面より見れば、社會の進歩と誘導する一大動  
機ありと云ふて得べし、故に其記述する所常に社  
會の征路に先つこと一步にして、恰も之が先驅と爲  
るが如き觀察にあらざ、是の故を以て主觀的に新  
聞紙の歴史あるものと稱察すれば、取も直さず一國

の文明史と大なるを得べきあり、然りと雖も、主  
觀的に歴史の客觀的の歴史あつて、始めて能く存在  
するを得べし、先づ新聞紙其者の沿革を知らざれば、  
何ぞ其記述の事實に就て、之が沿革と探知するの便  
あらんや、これ余輩が今日に方り、先づ客觀的に新  
聞紙の歴史を畧述し、後世史家の參考に資せんとす  
る所以あり  
余輩の温故知新を以て、社會進化の唯一動力と信  
するものにあらざ、然れども人間の智識なるもの、  
過去の事蹟を追求して始めて獲得すべきものありと  
確信するを以て、社會將來の發達を圓滿ならしめん  
ことと希望せんに、須らく先づ過去の経歴と研究  
するの必要と認めざるを得ざるなり、然るに當代の  
史家あるもの、往々にして古代の事蹟と考証する  
に全力を盡し、近時の出来事に向て、正則に研究の  
勞を執るもの殆んど稀なり、從て何れの場合にあつ  
ても、古代史の完備せる割合に比すれば、近世史の  
体裁頗る杜撰と極むるを常とす、これ畢竟事實の  
餘りに錯綜して、明かに因果の真相と觀破する能は  
ざるに基くすんばあらざ、この故に時として當代  
の史家にして、當代の事と記述するものなきにあら  
ざるも、多黨派の僞僻人物の偏愛等により、酷虐  
虚誇等の流弊と免かれ得ず、爲に身と無上裁判官の



地位に置き、公平ある判決と下す能はざるもの、比  
比として皆然らざるのなし、故に余輩敢て當代の  
人に向つて、當代の歴史と編纂せよと望むにあらざ  
只後世の人として正當なる裁判と下さしめんが爲め  
に、稍々秩序立たる參考材料と遺し置くを以て、當代  
の人々當代に對する、當然の義務也と信するのみ  
新聞紙の主觀的歴史が、能く其國の文明史たる價値  
と有する所以、既に前に陳述したる所あり、然  
れども新聞紙を以て、一種の史料と見做すに方りて  
い、其種類の數多にして、其性質の紛雜ある、殊に  
其記事の難駁杜撰あるが如き、之と鑑別するの困  
難頗る大にして、到底凡眼の士が能くすべき所にあ  
らざ、故に先づ之が客觀的の歴史と編纂し、各種の新  
聞紙に就て其起原沿革、若くは性質の一端と列叙し、  
後世の史家として取捨採擇の方針と一定せしめ、以  
て其眞價の存する所と知て、眼光と紙背に徹せしめ、  
主觀的歴史の基礎とあさしむること、最も必要ある  
急務ありとす、殊に史家の鑑識に至て、後世に至  
る程或は公正と得るに近かるべしと雖も、秩序立ち  
たる史料と還さんと欲するに方りて、成る可く其  
參考品の散佚せざる前、且つ故老等の生存する間  
に、之と纏むるの手段と盡さざる可からず、然るに

新聞紙の如き、世人々之と讀過する極めて冷眼と  
以てし、特に之と保存せんと欲するが如きもの頗る  
稀あり、故に新聞紙あるものゝ始めて世に現はれし  
より、未だ三十年に及ばざるに、世間多數の人々、既  
に其最初のものゝ題號さへ忘却するに至りたり、況  
んや其實物に至つて、百方之と穿鑿するも、尙之  
を見出さざるものあり、加之から其記者たる  
ものゝ新聞代謝極めて急速にして、最初に筆を執り  
たる人々にして、今日に生存する人々へ頗る稀に、而  
も其の人々に就て之を問ふも尙は漠然として、自ら  
自家の經歷と記憶せざるものゝ如し、若し斯の如き  
有様にして打棄て置かんや、我國の新聞歴史あるも  
の、終に曖昧模糊とあり、結局明治の一大史料と  
失ふに至るべきあり、余輩不肖と雖も、頗る此に鑑  
みる所あり、敢て自ら擄らばして我國新聞紙の客觀  
的歴史と編纂せんと欲す、これ固より後世の史家  
に向つて重要な史料と供するの價あきと信せれど  
も、聊々陋より始むるの素志と表はすのみ  
我國新聞紙の起原、世俗「讀賣」と稱するものに始  
まり、爾來幾多の變遷を経て今日の如き發達と遂ぐ  
るに至りたるなり、今其沿革と摘記するに方り、其  
順序と左の數項に區分をべし

第一 讀賣	第二 御沙汰書
第三 翻譯新聞	第四 新聞紙
第五 雜誌	第六 歐字新聞
第七 西洋新聞の起原	

第一 讀賣  
大坂藩城の時「讀賣」と稱するものありて其圖畫往々  
世に傳はる、これ其時之戰爭及び藩城の有様と繪

其始末と零記するものにして、本朝新聞紙の嚮導  
とも云ふべき者あり(詳細別項「本朝讀賣の起原」  
中にあり)  
徳川時代に至りて、貞享天和以前より世上の出来  
事と小紙に作り節と付けて、ツレナシ手拍子あどに  
て賣歩く事あり、これまた讀賣の一種にして  
「四條河原八景」に「こゝに戀路の世のうはさ唄に  
作りてよみうりの手拍子揃ふ笠の内  
「諸姫大鑑」に「夜さへ編笠ときてつれふしのよみ  
うり  
「人倫訓蒙圖彙」に「繪双子賣 世上にあらもる  
かはつる沙汰人の身の上の惡事萬人のさし合と  
かへり見せ小紙に作り淨るりに節付けてつれ節に  
て讀賣るあり愚ある男子老若のわかちなく辰巳あ  
がりのそよりものは是と買とりて樂とあそ戯に遊民  
のまわさきき事にさくぬ商人あり

あどあると見ても其頃頻りに流行しふること知る  
べし  
右の外橋のたもと或は辻々などにて、世上の出来事  
と繪に書きて賣りしものあり、之と辻賣繪双子と云  
ふ、これまた此頃一般に流行しふものと見ゆ  
其後元禄十一年に至り、左の如き令文と出して讀賣  
辻賣の類と禁止しふることあり  
一町中にてムザツ仕りたる小販ハヤリ事勿論當座  
の變りたる事故板行賣候もの有之候はば家主共  
致吟味何方にて左様のもの一切板行仕間敷  
候尤も辻橋にて賣候者有之候はば其町にて相改め  
捕へ候て番所へ可申來候センサクの上賣候者ハ  
不及申板行致候者迄急度可申付候退て改め人  
廻し候間其旨可相心得者也  
寅二月  
此後屢々禁制せられしかども、依然として流行し  
るものゝ如し  
爾來奇事異聞其他大事件のありし時ハ、必其顛末  
と筆記し書籍とあして刊行するを常とせり、赤穂義  
士が吉良家討入の讀賣ハ夙に人口に膾炙する所にし  
て、將軍家日光社參の記事、和宮御下向の時の記事  
及び東幸の時の御行列書の如きも亦今に傳はれり、  
安政の大地震後引續いて大津浪などありし事と、記



述しるもの安政風聞志、地震海嘯考等々世人の熟知する所なり  
今日にても田舎の祭禮などには、心中くどきとう一ツトお節あそびと賣るものあり、東京の縁日あそびにもツレアシにて心中物など諸ひ居るものあり、皆これ昔時の讀賣辻賣等の遺風あるべし  
讀賣といふ性質と異にしるものあれども柱、厨、芝居、相撲の番附、御役人附等頗る古くより發行しるものと見え、今日にあつては殆んど其の起原と詳かに知るに由なし、其板の何れも木板（櫻にあらず）あり、瓦板、餅板、蒔板等を用ひ替り目毎に市中と賣り歩くを例とし、其代物の一枚八文乃至二百文位あり  
(未完)

### 第二 御沙汰書

御沙汰書今日の官報の如きものにして將軍家殿中毎日の公事及び御布令叙任等の次第を記録しるものにて與御祐筆日誌より表御目附の手を経て茶坊主が寫し取り一ヶ月代價一歩づつにて配達するを例とせり（或は云ふ用紙の自辨にて半期即ち六ヶ月代一歩づつあり）これ徳川氏の初代に始りしるものの如くあれども八代將軍の時全國の寺小屋に命じて習帖とあさしめ習字の傍時の法律を知るの便を得

### 第三 翻譯新聞

「讀賣」、「御沙汰書」等の性質より云へば稍々今日の新聞紙に類似しるものあれども純然たる新聞紙

の体裁と具へるもの外國新聞と翻譯し又翻譯ししる時に始り其渡來の最も古き香港にて發兌せし「遐邇貫珍」にして安政年間横濱にて之を翻譯し漸次都鄙に傳播せり其後香港にて發行する「六合叢談」あるものありてこれを翻譯して播布せり「バタビヤ新聞」と稱する翻譯新聞と翻譯しるものもまた此頃に發行せり我國に外國と交際し始めたる和蘭と以て最初とされバタビヤ新聞の傳來も亦和蘭よりせる者と最も古しとバタビヤ新聞の開成所にて堀達之助氏等が翻譯を爲し本所の万屋兵四郎あるもの之を出版せり尤もこの以前より外國船が渡來しる際に必ず種々ある珍説を傳來し且つ又時の政府に於ても外國の事情を探知するの必要ありされば長崎在留の蘭人より出せる風説書あるものと通事に命じて翻譯せしめ江戸の奉行に呈せしめ其後之を諸藩に寫し傳へて以て外國の事情を知しむる便と爲せりバタビヤ新聞の如き其進化しるものあり以上の事實によりて之を考ふれば新聞ある語も全く支那より傳來しるものあると知り得べく之と内地にて發行するに至りしるもの自然の必要に迫られざるものといふ云へば最初外國の新聞に模倣しるものなること疑ふ可らざる事實あり

### 第四 新聞紙附活版起原考

純然たる新聞紙の体裁と具へるものにて本邦人の手に成れるもの元治元年横濱にて發行せし「新聞紙」と以て元祖と記者の岸田吟香、本間潜藏、濱田彦藏等の諸氏にして最初の半紙二つ折にて月二回（上旬下旬）の發兌とあし木板に彫刻して刷行せり記事の重に浪士の運動戦争の模様及びボンの外國談其他種々の西洋事情等にして編輯事業より板下書



賣弘め等に至るまで凡て右三人の記者にて周旋せりと云ふ之と同じ頃に横濱百〇一番館に居住せるべしと稱する基督教の宣教師が「萬國新聞」と云ふ石版摺の新聞を發行せり表紙の題に海面と見せ蒸氣船の浮べる所と畫き萬國新聞の四字とちらし書に合せり併しこの新聞の記事概して基督教に關係あることのみにして自然讀者の數も少かりしが如し「新聞紙」の慶應二年頃まで發行しより同年の冬岸田氏上海に赴くに及び「ボンの辭書」始めて出來し岸田氏も其用向にて渡航せり終に廢刊せるに至れり其後暫く中絶せしが慶應三年十月に至り柳河春三氏が發起して西洋雜誌と稱する毎月刊行の新聞を出版せり發行所の江戸開物社と記し木板摺の小冊子にして一冊の代價二匁づなり記事の題號の如く西洋の記事其重なる部分と占め歴史、天文、地理、理化學等の新説を彙纂せり其緒言と摘載とを左の如し

にあらひ諸學科の新説いさなり日用便宜の方法等と集めて海内の同好に頒さん欲と今先づ二三友人の譯稿と抄出して嚆矢とを希はく博雅君子吾等の志を裏成せよ

慶應三年冬十月 楊江柳河春識 春三

西洋雜誌の四五號まで發行し後之と改題しするものと見之慶應四年二月に至りては柳川氏等更に中外新聞と改題し之と刊行せり神田孝平氏、渡邊温氏等また其編輯を助けたりと云ふ最初の木版にて印刷しする小冊子ありしが後に活版にて刊行せるに至れり東京に於て鑄造活字を用ひする大島圭介氏（文久元治の際江戸新錢座にて蘭書と纂譯し築城要法、歩兵操練等の書と著し自ら活字と造りて印刷せり）と除きて此の新聞と以て嚆矢とを其後日々新聞と改題しよりしと問ふと柳川氏が病死しよりしかば同時に廢刊に属せり

（附言）新聞紙と活版との極めて密着する關係と有るものあれば左に日本活版考の要領を掲げしこの事に就ては築地活版所長田成氏より有益なる材料と寄せられしを謹んで感謝の意を表す我國古より正版活版の二種並行はれしるの世人の知る所にして活版の果して何の時代より行はれ初めしものあるや未定あれども本朝書籍考元

宇釋書の條に「寛永元年小島某利調開版を是より以前の（初板及再板の意ならん）活字の無点本あり云々」とあり而して元亨釋書三十卷の是より先き後光嚴天皇の貞治中（二千〇二十年頃）及び後龜山天皇の承和（二千〇三十七年）の内に刊行せられしことあり夫より三十年後に至り明の歸化人某々活字板にて五百家注釋柳集を刊行しするこの源重基が鶴鶴漫錄あり又之と同じ頃に夢窓國師も活字を用ひて多く佛書詩集等と印刷し下野足利の學校（顯仁元年長尾景久足利學校と再興と）にて亦數種の開板ありて其活字尙現存と云ふ以上の事實より推量すれば活字の既に二千年三十年より稍々盛に行はれ後に正板（板木）とも壓倒するに至りたるが如し慶長日記十四年十一月十二日の條に「近年摺本の板木匠み出と云々」とある此頃正版全く中絶して活字版のみ行はれざるを証するに足らん而して此活字の漢土又ハ朝鮮等より傳へたるものなるか或ハ全ク我邦人の意匠に於けるものなるかハ穿鑿すべき一要件あるが宇佐八幡宮の神庫其他九州地方の古寺にハ往昔貞觀の頃經文を印刷するに用ひたるものありと言傳ふる古活字數百個を存せり（詳細ハ吉良義風氏の

考証あり）若し此事實にして大差なくハ漢土に於て宋の慶曆中始めて活版と作るに先づこと殆んど二百年にして彼國より傳來せしものにならざるべし

西洋にて印刷の起原と云へば西曆千三百年代の終り（我々二千〇五十年頃にて活字と以て元亨釋書と印刷せしに後るゝ三十年餘）佛王チャールス六世が骨牌と製せしとと始とをこれの只木板を用ひて紙帛に印刷しするまでのものなり而して彼の日耳曼人グデンホルツ氏が始めて活字と發明しスコーファル氏が活字の鑄造術を發明せし我々後花園天皇の寶徳長祿の頃にして始めて元亨釋書と印刷しする年と距ること既に百年餘ありと云ふ以上の事實によつて之と推せば我國にて活字の發明ありするの既に數百年以前の事あれども木板彫刻の種々都合ある事情ありて殆んど巧妙の域に達しするに關はらず活版印刷の術に至りてハ依然として是と云ふ進歩も亦一々文字と木刷の一端に手刻し之と野板の間に植込み又ハ活字のみ組合せて印刷するに過ぎざるを以て其摺本も常の板木摺に比すれば鮮明からず植字校合の仕方も粗漏あり



しより誤字多き摺本を指して活字摺の如しとの套語を出るに至れり故に活字摺の神速と輕便といふ未だ誤謬多きと云ふ一失と價人に足らざして大に世の好事家の擯斥を受けるに至りたるの甚き惜むべき次第ありと云ふべし

(未完)

斯くて天保弘化以後に至て外舶の渡來漸次頻繁となり同時に精巧なる印本亦と續々舶來しければ人々始めて我印刷術の迂遠なることを感じざるあらんが故に長崎の人にて和蘭通詞役本木昌造と云ふ人あり年少の頃より西洋工藝の道に熱心ありしが偶然の事より活字鑄造の工夫と思立ち嘉永四年の頃種版と水牛の角に刻み之を鉛片に打込み銃丸の如きものに嵌込みて母型と爲し以て鉛活字と造ることを得されば自著の和蘭通便に關する一冊と秘刊し知己の朋友と始め和蘭人にも若干冊と頒ちしに蘭人等太く賞賛して日本のスコップアルありと云ひしことありと云ふ是我國にて鑄造する活字にて印刷しする隔矢にして活字改良の第一着歩あるべし然れども本木氏少此業と大成して十分使用に適するに至らしめしこれより數年の後にして其間に數回の失敗と謂ふべからざる困難を経て終に今日あると致しするものにて其經營の隨轉と感慨に堪へざるものあり

東京にて最も早く活版印刷業と始めたる左院、日就社、藏田活版所、横濱毎日新聞社等にして何れも本木氏の活字を購求しするものあり其後平野富二氏と出京せしめ活版製造所と神田佐久間町に設けたりしがこれ即ち今の築地活版製造所の濫觴にして活字製造業者の嚆矢ありこれより以後東京を始め各地方に於て活版業と營み新聞紙と發刊せんとするもの多し此製造所の活字を用ふるに至りたり

是より先き大島圭介氏少江戸新錢坐に於て自著出版の爲め活字を製造しする由前にも掲げたる如くあるが時代より云へば本木氏の發明と同じ頃あれども惜い哉氏のみ自用に供する事にのみ力と盡し廣くこの業を擴張するの計劃あかりしり本木氏と共に本邦鑄造活字の鼻祖たるの榮と荷ふに至らざりしあり

要するに印刷事業の一國文明の大源泉にして其盛衰によつて國家の隆替と下るに足るべし殊に新聞紙の如き其掲載すべき項目悉く一刻と争ふの事實あれば到底活版を以てするにあらざれば其目的と達する能はざるべしこれ故に活版事業の發明あつて始めて新聞紙として眞の新聞紙と爲るを得せしむるに至る新聞紙の活版業に於けるの實に親

本木氏が最も苦心しするの字母の製法にして幾多の失敗と重ね幾多の金錢と消費しされども未だ充分なる好結果と得る能はざりしが慶應の末年薩摩の藩士五代才吉(友厚)重野鐵之丞(安釋)の二氏上海に於て英和辭書(俗に薩摩辭書と稱し重野氏の門人高橋新吉、前田健吉、前田正名等の諸氏専ら編輯に従事せり)と活版に附し且つ漢洋活字若干亞米利加形手摺器械一臺と購求して持歸りされば之と譲り受けて標本と爲し始めて一大改良の緒につくと得たり其後英華書館活版技師米人ガンブルと云ふもの滿期歸國するに際し宣教師フルベッキ氏の紹介によりて之を雇聘し便宜長崎製鉄所の附屬として活版傳習所と興善町唐通詞會所跡に設け活字鑄造電氣銅版製造の業と授けしむ(時に本木氏製鉄所長あり)これより此技藝頗る進歩し我國活版改良の淵源とありぬ此時傳習所に入りたるもの後一部は本木氏に屬して長崎活版所東京築地活版製造所大坂北久太郎町活版製造所の本源とあり一部は製鉄所と共に工部省に屬し明治五年東京に移し勸工寮活版所とあり後左院中にありし活版課と合して太政官印書局とあり其後更に大藏省紙幣寮と合して印刷局とありたり

子の關係ありと云ふも不可あかるべしこれ即ち余輩が乾燥無味の文字と並列して敢て讀者の倦厭と顧みざる所以にして而かも岸田柳川等の諸氏と以て本邦新聞紙の鼻祖とせんと同時に本木氏と以て開接に之を保障するの責と盡しするものと特筆する所以あり

(未完)

中外新聞の發刊と同じ頃には岸田氏上海より歸朝して再び「もしは草」なるものを横濱にて發刊せり体裁の半紙二ツ切りと二ツ折りにして十二枚宛綴ぢ込み表紙の黄唐紙にて上の方に横濱新聞と横に書き真中に「唐草様の文字にて「もしは草」と記せり最初此名を命ぜるときに種々の題目を案じ置き籤取りにて之を擇び岸田氏自ら揮毫せりと云ふ代價の一冊一友づつにして賣捌り凡て東京の繪草紙屋に依託し築地小田原町の黒屋金右衛門照降町の恵比子屋正七等の其重なるものあり此頃の記事は矢張り戦争の事と主としされば販賣高も頗る多き代り一方に於て其記事の爲めに記者が圖らざる困難と云ふものも少からずと云ふ同年の冬岸田氏再び海船の持主となりて上海に渡航しされば栗田萬次郎氏其後之を繼ぎしが此頃の諸國の戦争も漸次靜穩に歸し新聞種も少くなり且其記事の餘りにシカツメらしくありたる故



う運々發賣高とも減るに至り終に五十號内外にて  
休刊するに至り此項より新聞紙の發行一種の  
流行とあり明治元年前後東京にて發兌せしもの  
にても殆んど三十種に近き程ありし今其重なるもの  
と列挙され

太政官日誌、江城日誌、鎮臺日誌、東京府  
日誌、金川府日誌、鎮府日誌、市政日誌、即日誌  
東京城日誌、東郷日誌、公議所日誌  
以上の概して官報の種類あれども悉く民間にて發  
行しうるものあり此項にあつては官廳の御用と稱  
するもの頗る市の利さるものと見之好んで斯の如  
き題號を付し各官衙始め役人等に賣付くるを勉め  
り今參考の爲め市政日誌（慶應四年五月第一號を發  
兌す）の緒言を左に掲載せし

此書の市民へ廣く相弘熟讀致度之素志を以て出版  
入費迄の直段にて賣渡し以開取次者も其意を守  
り深切に賣捌は様可致此上尙無益の入費を省き彌  
彌下直に追々出版可致事

佐久間氏藏板  
右の外専ら通俗の記事と載せざる新聞紙にハ  
内外新聞、遠近新聞、日要新聞、新聞事畧、西洋新聞  
外國新聞、六合新聞、新聞新報、明治新聞、都鄙新聞  
テレグラフ、金港雜誌、開知新聞、乗合はあし（もし  
は草の改題）

等あれども何れも一二號若くハ七八號位にて廢刊と  
あり稍長く續きざるハ太政官日誌（六七十號まで出

ハ高輪と過ぎさせ給ふの折柄英吉利のミニストル  
パルクパックスも御行粧と拜さんとして馬にまたが  
りイミ彼方此方と見やりてあるに疾御與も近よれ  
バ衛士等かたみに聲かけて下馬し脇寄と叫べどパ  
ックスの耳にも掛ねバ二度三度聲かくれど去らざ  
顔してありけると衛士等パックスと馬より引下ろ  
し押やりされば這はけしからぬ業ありとてパッ  
クスより掛け合とありされバ外國官より其筋へ言  
送りて御吟味の最中ありと聞きし言實にあるまじ  
き行迹あれはいかある禍と引出さんも知るべか  
らぞ外國にてハ他國より來れる者斯の如くの事あ  
りともまづかに言ひさとし夫にても聞入れねバ脇  
へ連行穩に其理と解さ以後つしまれバ杯云ふ  
のみにて更に心にも掛けぬ程あり然ると今我國の  
人ハ其御威光とかややかさんとて斯る事仕出  
しうるものあらんされども夫ハ却て我國人を賤し  
むるのみあらん

皇國の御名にさへさる大耻あれバ省てもつ  
つしむべき事ありされど其國にありてハ其國の掟  
に従ふ事世のあらひあれバパックスも亦た無禮を  
らぞといふべからずあながち尊むべき人とは思は  
れず  
因に云ふ先年佛蘭西にて博覽會と興行し頃ロシヤ  
の帝も見物の爲越されければ佛帝之と響應んと大

版）内外新聞（三十號まで出版等のみあり  
此項にあつてハ政府の權威極めて強大にして言論の  
檢束さる頗る嚴酷ありしかバ到底充分に直筆と揮ふ  
の餘地なく殊に戦争の餘燼未だ全く跡と絶さざりし  
を以て四方八方より種々の嫌忌と受け爲めに其記事  
の窮屈にして其筆鋒の曖昧ある今日より見るも尙怪  
むに足べきもの少しとせむ故に當時の新聞紙にし  
て往々横濱にて發行せるものあり且故らに外人の名

と記載しうるが如き多くこれ等の檢束と免かれ  
嫌忌と避けんとするの意に出でざるを知るべし前に  
舉げざるもしは草の如き其表紙の右側にハ横濱四  
十九番ウエリートの名を明記せり（未完）

明治二年頃瑞穂屋卯三郎氏が發行せし六合新聞ハ御  
用金廢止の建白並に新造貨幣の分量に關する記事及  
びミニストル不敬事件の記事と掲載して太く其筋の  
處罰と裝うしことあり今其の一項と轉載せし

○御着幸の日イギリスのミニストルと打るはあし  
かけさくもあやにかしこき 天皇の政と執らせ  
給ふの政府と鶏さく東の京に建てさせ給ひ再度  
此地に御幸あらんとて去る月はじめの七日に西の  
京と出させ給ひ神風や伊勢の國ある 大祖の大廟  
へ詣で夫より遙けし驛路と重ね東の京に着りせ給

其後明治四五年頃に至てハ官府の檢束稍寛かとあり



天下始めて治定の緒に就きたれば新聞紙の發行益々流行するに至りたるが

横濱新聞(今の毎日新聞)、新聞雑誌、日進真事誌(俗にアラク新聞と稱するもの)、東京日々新聞、郵便報知新聞、公文通志(今の朝野新聞)

等、其重なるものあり明治六年以後に至りて其數益々多し殆んど算數をべからざるに其二三を列舉すれば

仮名讀新聞、近事新聞、曙新聞、讀賣新聞、魁新聞、問答新聞、内外兵事新聞、繪入日曜新聞、木の葉新聞、實業新聞、開知新聞、穎才新誌、明治新聞、布告全報、御布令新誌、公布日報、あつち新聞、花語新聞、平仮名新聞、横濱新聞(前の横濱新聞と異なり)

東京繪入新聞、いろは新聞、中外商業新報、等尚頗る多し然れども何れも其名計りて殘しるのみにて今日まで持續しるもの極めて稀なり

明治十年以後に至りて其數愈々多し時事新報、明治日報、自由新聞、繪入朝野新聞、今の東京中新聞、繪入自由新聞(今の雷新聞)、自由の燈(今の東京朝日新聞)、開花新聞(今の改進新聞)、今日新聞(今の都新聞)、やま新聞、商業電報、國會準備新聞、公論新報、政論、日本、東京新報、國民新聞、江湖新聞(今の立憲自由新聞)、國會、東洋新報、自由新聞(前に記するものと異なり)民報、自由、あつち新聞、開はくれつ

等一々枚舉に遑あらざる故に此に只以上掲げたる中に就き重なるもの零拾草と掲ぐるのみに止め置くべし(未完)

沼間氏が毎日新聞に入るに及んで殆んど之に對峙するの勢ひにして常に相敵視して文壇に縱横せり福地氏曾て書と沼間氏に贈りて東京の新聞は一敵國と得たりと稱賛しるゝとあり當時の意氣さう想ふべきあり明治十四年八月の交北海道官有物拂下の事あり沼間氏等卒先して其の不可あると主張し累りに政府に向て忠告と試み大に人心を警發せ同年十月十二日國會開設の大詔下り翌年四月に至り大隈重信、河野敏謙等の諸氏と始め在野の名士百有餘人相謀りて立憲改進黨と組織するに及び毎日新聞の機關新聞と以て目せられ議論雄辯一世を驚動せり毎日新聞が始めて東京に移轉しるの際に秀英舎の一室を以て編輯局に充て表に小標札と掲ぐるのみありしが後十四年四月に至り元數寄屋町二丁目に移り十九年二月再び尾張町新地に轉じ單に「毎日新聞」と改題し以て今日に及び二十二年十月島田氏が海外より歸朝しるの際に掲載しる條約改正論及び二十三年三月紙面と改頁しるの際に告白しる第一期國會の政治意見の如き一種出色の文字にして特に世人の注意を引けり二十三年八月より附録として刷出しる上下兩院の議員六百名の亞鉛寫眞版有像の精緻優麗頗る世間の喝采と博しり

新聞雑誌 新聞雑誌の明治四年の暮に第一號と發刊し半紙綴にて木板の活字を用ひり最初の木戸孝

毎日新聞 毎日新聞の始め横濱新聞と稱し明治四年(月日不詳)に第一號と發行し本社と横濱本町六丁目(今に置き東京にも支社と設けり後横濱毎日新聞と改め陽其二氏等編輯に従事しるゝとありしが尋で栗本錫雲、妻木田宮、假名垣魯文等の諸氏交るゝ筆と執りたり明治十二年十一月本社と東京西紺屋町に移し題號と東京横濱毎日新聞と改む此より先き沼間守一氏等嚶鳴社と稱する政治法律の講研會と設け頻に民權の擴張と主張しりしが未だ其意見と文章に顯はして天下に普示するの機關をさとして新に一の新聞紙と發兌するの計劃ありしが偶横濱にて發兌する横濱毎日新聞が政治の中心なる府外に在りて社運振はせんと聞き社主と協議し該社の負債と擔して之を譲受けんと申込るに社主喜んで之に應ぜり仍て本社と東京に移し題號と改むるに至りり此前後より島田三郎、肥塚龍、青木匡、波多野傳三郎等専ら編輯に従事し大に記事の改良と圖れり改題の當時に掲載しる國會論數十篇沼間氏が滿腔の熱血を灑ぎたるものにして筆鋒萬丈の光焰と吐き大に輿論を震動せり爾來屢々精刻する法律論と掲げ且つ東京府の政治に關する適切なる意見と示し大に世人の注意と喚起せり當時文壇の老將と呼ばれらる福地源一郎氏の夙に官權主義と唱道して天下と睥睨しりしが

允氏等の補助により之と維持しりしが後に曙新聞と改題し青江秀氏主筆となれり發行所は始め河臺にありしが後銀座へ移り更に東京新報と改題し一時の官權黨の機關新聞と見做され大に世人の注意を引けり(或い太政官日誌改題して新聞雑誌とあれりとの説あれども其關係未だ判然せざるを以てこれと明記せず)

日新真事誌 日新真事誌の明治五年三月十七日第一號と發行せり記者の太政官の御雇英國人アラック氏にして最初の木板の活字にて薄唐紙を用ひりこれ從來我國にて發行せる新聞紙中最も体裁の完備せるものにして其体裁の總て西洋の新聞紙に模倣し難報物價廣告等殆んど今日の新聞と大差あるを以て題號の傍に「鋭刺屈」の文字と記しされ世人の普遍にアラック新聞と稱せり第一號發兌の際長く紀念に存せん爲め特に紙に印刷しるもの一葉ありてアラック氏より時の東京府知事由利公正氏に献せり後由利氏之と交詢社に寄附しされ同社の書籍部に於て今日尙之と保存せり今其第一號に掲載しる社告と轉載し其体裁の最初より能く完備しる一斑を示そべし(文中仮名の多き活字の不足ありし故と見るに足らん)



告白

コノ新聞誌ニ布告スル旨意ハ日本政府一新文明ノ  
治ヲアツキ人民ノ智識ヲスヘメ開化ヲタスク何事  
ニヨラス國ノタメ有益ナルベキコトガタ並ビニ  
御布告ルイ日本國中ノ事件學問藝術工作ノコト日  
進ノアリサマ交易ノ盛衰耕作ノヨシアシ諸色ノ南  
段モノノ産物諸道具ノ發明入船出船ノ品物田  
畑山林商船軍艦ナドノウリカヒノ輸出シ地面家作  
貨藏拾物盜品ノ知ラセ店々開キ案内見セ物遊  
ノ引札ソノ外國中ニアル所ノ珍事人ノ聞見ニ及バ  
ザル新聞奇事ヲコトノシ集メ其ノ上外國ノ事モ同  
様ニシダハメ人々ノ聞見ヲヒロクシ万事ノウケコ  
ノ新聞誌ヲ一見レバ世ノ中ノ事ヲ知レ人ノ世渡  
リノ道ヲノミ返シツテ天下ノヲトゾレ事情ヲ  
知ル便利ナルモノニテ人々ヲ知ラザカハヌ一日モ  
ナクテナラヌ大切ノ事ナレバ今コノ西洋ノ板道  
具ソノロズトイヘドモ因循スベキニアラザンバ  
先ヅ木板ノ活字ヲ以テ間ニ合セ英國ヨリ便利ノ道  
具ヲ取モセコノ業ヲ進テ盛大ニセシ依テ日々ノ新  
ラシキ實事ヲ記シ日本中ニ流布セシコノ望望ス願  
クハ四方ノ先生ヲナコノ意ヲ心得テ余ガ志ヲ助ケ  
コノ日誌ニ記スベキカドノ事柄並ニ世ノ中ニ  
益トナル事ハ何事ニカギラズ當局ヘ御知ラセ下サ  
レ候ハヤ速カニ出板シテ新聞紙ノ得アルコトヲ知ラ

濱間の鉄道も此頃始めて落成しるゝとて之に關  
る種々ある記事と新聞紙上に掲げ大に世人の意注  
引けりブラツク氏ハ今の講談師ブラツクの實父に  
て數年間日本に在留しりしハ頗る邦語に通達し  
且つ邦文と能くせり學識も非凡ありしとて紙而  
一種の光彩と有し幾多の新聞紙中嶄然として頭角  
顯はせり御雇滿期の後ハ専ら編輯上に力を用ひり  
シガ其論鋒稍々急激に涉り遂に政府の買上ぐる所  
かれり發行後ブラツク氏の香港に渡航して更に一  
聞と發行しりしガ數年前に病死しり云ふ日進  
眞事誌ハ最初の築地新築町五丁目にて發行し次で芝  
山内源興院(ブラツク氏自宅)に移り後更に銀座四丁  
目に轉せり今の朝野新聞社即ちこれなり(但し新聞  
紙の上に於てハ全く關係ナシ)

(未完)

朝野新聞  
ハ初め公文通志と題し明治五年の春  
(月日不詳)其の初號と發兌せり雲州明石の岡藩にて  
資金と出し西村準四郎氏之ガ主任とあり最初御成道  
にて發行せり後に日新眞事誌の跡へ移りて朝野新聞  
と改題し編輯ハ成島柳北氏之ヲ掌り成島氏の一種  
非凡の文才と有しされハ紙面亦特殊の光彩と放ち殊  
に其雜錄欄内に於ける詩文隨筆等ハ朝野新聞獨得の

セ移リカウル世ノアリサマヲ承知シタマワン  
ヲ欲ス  
但日本國中役入町八百姓ノ差別ナク遠國在々  
村々マデモ當局ヨリ早速ヨキタヨリヲ以テ配達申  
スベクコノ新聞御望ノ方ハ住所名前ヲ委シク認メ

當社ニ御差出し成サルベキ

一日に付 金一兩一分  
一ヶ月に付 金一十二兩

若シ前金ニテ求メコレナキ方ハ一枚一朱宛ノ事  
何事ニヨラス案内知ラセノ引札ハ字數五十字ニ付  
一ヶ月四兩ニテ引請發兌候事

新聞紙ノ價ハ今十七日ヨリ四月朔日マデノ間ハ隔  
日ニ第十字ヲ限リ出板ノ事

但四月朔日後ハ一六休日ノ事

洋和字書開板被成度方ハ當社ニ於テ相當ノ價ニ  
テ引請候事

第一號にハ特に讀者の注意と引かんガ爲め右の如  
萬能膏的の廣告と載せ加ふるに同年二月二十三日の  
大火事に關し時の參議板垣、大隈、木戸、西郷及び岩  
倉右大臣、三條太政大臣等より由利東京府知事へ宛  
てたる窮民救助の通達書と掲げられ紙面頗る賑や  
かにして發賣高また頗る多かりしと云ふ且又東京横

面目として大に世人の賞賛と得たり明治十八年に至  
り成島氏死去するに及んでハ末廣重恭氏專ら編輯に  
從事せり後末廣氏海外に漫遊するに至り犬養毅、尾  
崎行雄の二氏入て之に代れり明治二十二年條約改正  
の議論盛なるに方り最も熱心に斷行論と主張せり二

十三年一月尾崎氏の海外より歸朝するに及び大に紙  
面と改良し論說雜報等悉く新面目と開けり就中朝  
野の人物評ハ縱橫無盡一世と罵倒せり同年十二月尾  
崎氏等と始め從來の記者舉て退社し別に民報と發兌  
するに至り渡邊治、波多野承五郎等の諸氏之れに代  
れり

郵便報知新聞  
ハ明治五年三月第一號と發兌せり  
始めハ太田金右衛門(泉金と稱す)小西義恭、飯田良  
作等の諸氏之に従事し岸田吟香氏も亦暫時編輯と助  
けたり明治七年五月栗本鶴雲氏入って主筆となり八  
年三月にハ藤田茂吉箕浦勝人の二氏入社し九年七月  
矢野文雄犬養毅の二氏入社最初中旬一刷の半紙  
版小冊子にて重に驛遞の御用と勉め全國無遠送料に  
て配達せらるゝの特權と得たり六年六月(第五十號  
より)一枚刷とあし日々刊行に改む明治八年民撰議



院の建白あるや卒先して之を掲載し大に世人の注意を喚起せり其後藤田箕浦二氏の起稿に係る國會開設の議論を連載しこれ又大に好評を博せり十年八月第一回内閣勸業博覽會の開設せらるゝや總編輯人印刷工場に臨しめ之を實見せしむ此頃未だ印刷機械の完備せる者極めて稀なるを以て總編輯引きり切らざりしと云ふ明治十四年前後政黨論の盛あるに方りて熱心に改進黨主義を唱道し毎日新聞と相應援せり世人毎日报社を以て改進黨中の急進派を以てし報知社を以て温和派を以てせり其の保護貿易論の如き蓋し最も世人の注意を喚起ししものと云ふ可し十九年八月矢野氏海外より歸朝するに及び紙面に一大改良を加ふると同時に従來八十三錢ありし定價を二十錢に引下げざりこれ實に府下の新聞社會に一大驚愕を引起ししものにして従來大抵五六十錢乃至七八十錢の定價ありしと相競うて引下ぐるに至りざり之れと同時に種々ある海外の新思想を吹聴し且つ文學理學等の記事にも力と盡ととなれり此際既に記載しるユニテリアン教の教義及其他の時事日本の基督教社會に自由神學の分子を注入ししもの

第一着歩にして之を爲めに一般の宗教上に及ぼせる影響を少くしとせ廿一年に至り朝夕刊行の新法を實施しざりしが社會の需要急からざりしが故に暫くにして之れを止め毎日刊行とあしざり廿二年條約改正の論起るや率先して條約改正問答を掲げ全力を揮つて斷行論を主張せり廿四年四月より毎月曜日の休刊に復し日曜附録として報知叢談と稱する文學雑誌を發兌することとあせり森田思軒村井弦齋等の諸氏主として文學上の記事と擔任し紙面亦一種の特色を有す世人の之を呼んで報知社文學と稱を會て矢野氏を掲載しる浮島物語、想起錄等一時の文學社會に新現象と與へざり

(未完)

の沿革の去月十五日の紙上に掲載ししれを詳しく此に述べ只其特色とも云ふべきもの

一二を擧ぐれば  
第一 傍訓新聞の鼻祖なる事是あり  
第二 讀み賣りを爲ししる新聞の鼻祖なる事是あり  
第三 始めて配達人に荷箱及び鳴鈴を持ししることは是あり  
右の凡て社長子安岐の創意に成り第一號發兌の際より

り實行しる所にして大に世人の注意を引けり其後特に文學上の記事に力を用ひ今日の文學社會に大家と稱せらるゝ人々にして讀賣新聞を紹介ししもの頗る多し  
本年に至りては文壇の梁山泊と稱せられし硯友社の一派其の機關雜誌江戸紫を廢刊して同時に該紙上に江戸紫の一欄と設け同社の諸氏交も筆を執り錦上更に之を添ふるに至りざり目又演劇の事に就て數年來特に力を用ひ新古の院本脚本等にして該紙上に掲げざるもの頗る多し  
東京繪入新聞 明治八年に其の第一號を發刊せりこれ本邦にて發行せる繪入新聞紙の鼻祖なり且又新聞紙上に小説を掲げざるも亦該新聞を以て嚆矢とす前田香雪、飯名垣魯文、高島監泉等の諸氏交も筆を執り此頃に通俗の新聞紙にして續話等と掲ぐるの讀賣新聞と繪入新聞の二者にして一の筆質を以て特色とあし一の愛嬌を以て長所とあし相對して旗幟を顯へせり其後明治廿一年に至り繪入新聞ある題號を改めて東西新聞となし政治上の記事にも力を用ひざりしが二十二年に至り有名なる東京府會議員の賄賂事件と掲げ大岡育造氏の爲めに告發せられ久しく

訴訟に關係せし裁判終結の後間もなく廢刊するに至りざり  
中外商業新報 三井物産會社の創設に係り明治九年十一月二日より發行せりこれ我國商業新聞の鼻祖にして今日に至りて其の號數既に三千號に垂んとす

改進黨新聞 最初有喜世新聞と稱し明治十一年一月三日に第一號を發刊し半紙二葉を以て一部とし定價一部五厘一ヶ月十錢あり當時新聞紙其數少からざりし半紙を以て印刷し五厘を以て定價とせるもの始めてありしかば大に世人の稱賛を博しざり寺家村逸雅氏専ら財務と統督し天野可春、竹中重固二氏専ら編輯と司どり栗本勳雲翁も亦力と編輯に補はれざり尋で白石千萬、前島和橋、野田千秋、伊東專三、須藤光輝等の諸氏交も入社して編輯に従事十二年二月料紙を改めて西洋紙八頁とせし廿四年四月再び半紙五枚に改む十六年一月十一日第千四百九十六號を以て發行を禁止せられ一時解社の不幸に遭遇せり同年三月十日辛ふして發行の許可を得開花新聞と改題して第一號を發行し寺家村逸雅、須藤光輝、



岡野伊平、廣岡聖太郎の諸氏専ら之に任ぜ其四月須藤南翠氏の小説「昔語千代田刀傷」出で聲價騰々開花新聞の名大に世に傳る十七年に至り藤田茂吉氏の幹旋により改進黨と連脈を通じ大に事業を擴張せり同年八月一日を以て西洋紙一枚摺とあし「改進黨新聞」と改題す藤田氏自ら紙面を監督し枝元辰辰氏論説を擔任そ其後須藤氏の小説「綠葉談」の出るに及んで改進黨新聞の改訂小説として目ざさるゝに至り大に文學社會に聲價を博しより尋で小宮山天香氏の「聯島大王」出でこれまた大に好評を得る明治二十三年十一月故ありて改進黨の關係を切斷し中正獨立進歩と以て主義とし藤田枝元の二氏之が爲に社を退き桐原拾三氏等主として政治經濟の事に力と盡し須藤南翠三品蘭溪、山田美妙齋等の諸氏専ら文學美術に力を用ひ紙面大に光彩と放つに至り

東洋自由新聞 明治十四年の春初めて發行を西園寺公望氏之と主とし松田正久、松澤求作、光妙寺三郎等の諸氏ま之に従事せり議論卓落筆鋒一種の氣焰と吐く世人呼んで東洋のガンベッターと稱を發行

後幾くなくして徳大寺實則氏の勸告により廢刊をることとあれり

自由新聞 明治十四年の頃自由黨の組織せられざる際其機關新聞として發行されり最初板垣退助、馬場長猪、田中耕造、田口卯吉、末廣重泰等の諸氏交り筆を執れり馬場氏の「本論」田口氏の「時勢論」「日本銀行論」等ハ最も有名の議論にして大に輿論を震動せしめり後馬場田中等の諸氏退社するに及び星亨氏古澤滋氏等主として之に従事せり明治十九年自由黨の解散せるに及んで全く廢刊に属せり

明治日報 亦自由新聞と同じ頃より發行せり最初丸山作樂、石井南橋、林洞海、福原恭輔、太田實、關謙之等の諸氏之に従事し後に三崎龜之助、西尾藤市等の諸氏編輯と主としより東京日日新聞と共に帝政黨の機關と稱せられ自由黨改進黨の諸新聞に對抗して花々しき論戰とあせり明治十九年に至り故ありて廢刊を

(未完)

時事新報 明治十五年三月一日第一號と發行す三田の老翁福澤諭吉氏の監理に係り重に力と實業社會に用ひ明治二十年十一月一日より紙面を改良し赤色の洋紙と用ひ年中無休刊とあせりこれ我國に於ける無休刊新聞の嚆矢あり最初より編輯に従事する八々の中重なるハ波多野承五郎、岡本貞徳、中上川彦次郎、渡邊治、伊東欽亮等の諸氏あり福澤諭吉の筆に於ける論文中にハ斬新奇警のもの頗る多し就中賣藥論、男女交際論、日本男子論、帝室論、國會始末等最も有名なり賣藥論ハ東京賣藥商より名譽回復の訴訟と起され紛議結で解けず施て一年有餘に及ぶ

東京中新聞 初め繪入朝野新聞と稱し明治十八

年より發行せり淺野乾、山田風外、前田香雪等の諸氏専ら編輯に従事せり明治二十一年江戶新聞と改題し二十三年六月一日更に東京中新聞と改題す大岡育造氏主として編輯に従事し小説家としての廣津柳浪、渡邊乙羽等の諸氏専ら筆を揮へり

都新聞 初め日曜新聞と稱し永井碌氏等編輯に従事せり十八年六月今日新聞と改題し毎夕發兌とあせりこれ我國に於ける毎夕配達新聞の嚆矢あり假名

垣魯文、齋藤綠雨(今の正直正太夫)等の諸氏筆を採る後伊東專三氏入社して編輯に従事す二十一年十一月十六日題號と都新聞と改め毎朝配達に改む日置政太郎、波多野承五郎、黒岩涙香、柳塲亭寅彦、廣岡柳香等諸氏交り筆を執る

自由新聞 明治十五年九月一日に第一號と發行を別主筆と置かば社説ハ和田稻穂氏小説ハ宮崎富要、渡邊文京の二氏擔當し廣岡柳香氏客員より第一號にて發行と停止せられ後五週間に於て第二號と發行す(十月六日)以來發行と停止せらるゝ事五回の多きに及び永きハ七週間に及びしとあり論鋒の鋭利かりしこと想ふべし後にハ高橋基一、黒岩周六の二氏主として編輯に従事せり二十三年十一月十五日雷新聞(雷新聞ハ二十三年六月に第一號と發行し記者ハ渡邊文京、服部徹等の諸氏あり)に合併して繪入自由の名と廢せり雷新聞ハ二十四年六月二日に至り朝陽新報と改題す林林次郎氏主筆より(未完)

東京朝日新聞 初め「自由の燈」と稱し明治十七年五月十一日より發行を小室信介宮城夢柳等の諸氏主として編輯に従事す十九年一月十四日「燈新聞」と改題し二十年四月更に「めざまし新聞」と改む星亨



日本にっぽんの初め「商業電報」と稱し明治十九年十一月より發行はつぱうその後「東京電報」と改題し陸實國友重章等の諸氏編輯へんしゅうと學りし廿二年二月更に紙面と改良し

題號だいごうと改めて「日本」と稱しょうと同年夏秋之際條約改正論  
 の盛さかあるに當り卒先して大隈伯の改正案に反對し全  
 力を揮て中止論と主張しちやうと日本新聞の名蓋し大に之よ  
 り顯あはれ世人の目して新保守黨の機關とあどに至れ  
 り陸實氏主として編輯に従事し朝野の名家にして社  
 友しゆうたるもの頗る多し

やまと新聞　明治十九年十月を以て第一號と發  
刊せし條野探菊　大澤綠陰　南新一、一筆庵可候等の諸  
氏交り筆と執る同新聞の第一號より三遊亭圓朝の演  
話と連記して之と掲載を新聞紙上に講談の筆記と載  
せるに此新聞と以て嚆矢とその他探菊氏の人情小説  
新二氏の劇評等の時々好評と博し中以下の社會に最  
も多く愛讀者と有と

新聞紙と雑誌との區別の殆んど立て難し記事と以て

區別し難く、体裁と以て區別し難く、名義と以て區別し難く、體裁と以て區別し難く、名義と以て區別し難し。雜誌の名義と有るものゝ内最も古き「慶應三年に柳川春三氏が発兌せる『西洋雜誌』」これあり。然れどもこの雜誌の殆んど當時の新聞紙と異なる所あり。と以て前に既に其概要と掲げたり。其後の更に雜誌の名と有るものゝ多くは、雜誌らしきものもあかり。一が明治六年に至り、福澤諭吉、森有禮等の諸氏、明治六社なるものと設立して「明六雜誌」と發兌せられ、蓋し我國に於て學術文藝の會と結びし嚆矢にして、學術雜誌の祖先なりと云ふも可あるべし。左に其發行の旨意と接載せし。

頃日吾儕盍簪シ或ハ事理ヲ論ジ或ハ異聞ヲ談ジ  
ハ以テ學業ヲ研磨シ一ハ以テ精神ヲ爽快ニス其  
論筆記スル所積デ冊ヲ成スニ及ビ之ヲ鏤行シ以テ  
同好ニ頒ツ瑣々タル小冊ナリト雖モ邦人ノ爲メニ  
智識ヲ開クノ一助トナレバ幸甚

明治甲戌二月 明六同社識

本朝ニテ學術文藝ノ會社ヲ結ビシハ今日ヲ始メト

大同新聞  
の初「政論」と稱し廿二年六月十一日  
發行を（是より先「政論」と稱する雑誌あり政論新聞  
の即ち之と改めたるものあり）後藤白の機關新聞と

して盛に大同團結の主義と主張を大石正巳、瀧本誠一等の諸氏專ら筆と探る廿三年六月一日大同新聞と改題し、末廣重恭氏主筆とあれり二十三年十一月二十五日（第一期帝國議會の召集日）に東京公論大同新聞の二新聞と合併し「國會」と改題を末廣重恭志賀重昂三宅雄次郎等の諸氏交も筆と探り幸田露伴氏石橋忍月の二氏まづ文學上の記事と掌る

府下の新聞紙中尙ほ記すべきもの頗る多く且つ  
地方新聞中にも是非其沿革を明かにせざる可  
らざるもの少からず既に其調査を終へざるも  
のなきにあらざれども久しく乾燥無味の文字と  
排列して讀者を倦ましむるに忍びず故に新聞の  
沿革のみ此れ限りに筆を止め更に雜誌の沿革  
に移るべし

ス而シテ社中ノ諸賢ハ皆天下ノ名士ナリ人皆謂ハ  
 ソ卓犖奇偉の論千古不磨ノ説ハ必ズ此會社ヨリ起  
 ラント何トゾ諸先生ノ卓識高論ヲ以テ愚蒙ノ眼ヲ  
 覺マシ天下ノ模範ヲ立テ識者ノ望ヲ曠フセザラン  
 コトヲ是祈ル

明六雜誌めいろくざっしの五六十號ごそくごうにして廢刊はいかんせり尋で交詢社かうじんしゃの設立りつありて「交詢雜誌かうじんざっし」と發兌はつたいと交詢雜誌かうじんざっしの明治十年めいしじゅうねんの九月くわいげつより發行はつぱんし會員かいゐんの重に福澤氏ふくざけいの一派いっぺありこの頃ころより種々しゆしゆある學術がくの協會けいゐ續々つづ設立りつせられ學術雜誌がくじの發行はつぱんさ頗る多し左に其重そのおもなるものと列記れつきせし

學藝志	明法志	法律雜誌	林學協會雜誌	政理叢談	東洋學藝雜誌	獨逸學協會雜誌
東京學士會院雜誌	東京地學協會雜誌	法學協會雜誌	中央學術雜誌	大日本農會報告	歐米政典集誌	國家學會雜誌



哲學會雜誌  
統計集誌  
羅馬字雜誌  
東京人類學會雜誌  
東京哲學學會雜誌  
數學協會雜誌  
東京地學會雜誌  
工學會雜誌  
橫文學生雜誌  
法理精華  
天文  
教育時論  
國政醫學會雜誌  
以上一々其畧沿革と取調べられ、逐次記載せんと思ひされども、繁忙ある日刊新聞の紙上に、到底之を載せ盡せと許されば遺憾あから其題號のみを掲ぐることにあしう。

附言前號の紙上に都新聞の始めの日曜新聞と稱し、永井碌氏が編輯に従事せし旨記載せし事實相違に付き此に正誤を

史學會雜誌  
理學協會雜誌  
明道協會雜誌  
大日本教育會雜誌  
東京醫學會雜誌  
植物學雜誌  
大日本衛生會雜誌  
私立文學會雜誌  
學士會月報  
明法雜誌  
學報  
教育報知  
日本法律雜誌  
普通教育新聞

イア一四万

誌」も亦同年九月より發行す婦人雜誌にして専ら婦人の手に成れるもの此雜誌を以て始めと其後に至りて「國の基」「婦人教育雜誌」「婦人衛生會雜誌」「婦人教育雜誌」「道之友」「北陸婦人會雜誌」「國秀雜誌」「女學生」「つばみ」「成立學舍女學講義錄」「通信女學」「婦女雜誌」等前後發行せられれども今一々之を詳述せざ

基督教の雜誌中最も古き「七一雜誌」あり明治八年十二月二十七日神戸にて第一號と發行し、後十六年七月「福音新報」と改題し、同年十一月大坂に移轉せり、後十九年二月に至り「太平新報」と改題せし、同年三月事故ありて廢刊せり、東京にて發行するもの明治十三年十月に發行せし「六合雜誌」を以て最初とす、小崎弘道、田村直臣、横井時雄、植村正久、高橋五郎等の諸氏交々編輯に従事し、十六年二月に至り「東京毎週新報」と發行せし、十八年一月より「基督教新聞」と改題し、其後に至りて「正教新報」「聖書の友」「真理」「日曜雜誌」もにたり、あん、「教義」「標準」「公教雜誌」「野聲反響」「福音週報」「福音新報」「公會月

主として婦人の事と記載する雜誌にて最も早く發行し、るもの「女學新誌」あるべし、近藤賢三、巖本善治等の諸氏専ら編輯に従事し、第一號明治十七年六月十五日に發行せり、始めの毎月一回の發兌ありしも、後に毎月二回に改む、明治十八年に至り、故ありて廢刊し、同年七月更に「女學雜誌」と發行し、編輯に依然近藤、巖本の二氏之に當る今の「女學雜誌」即ちこれあり、後近藤氏の死去するに及んで、巖本氏の専ら之を監理す、明治二十三年より紙面と改良し、政治上の問題と論議するに至れり、婦人雜誌にして政治の事と掲ぐるのこれと以て嚆矢とす、女學雜誌」あるもの、發兌されしも、た此頃ありしと問ふ、かくして廢刊に属せり、明治廿三年に至り「君子と淑女」第一號と發行せし、後貴女の友と改題す、「いらつめ」の同年七月十六日と以て第一號と發行し、最初の毎月一回づつ發行せし、廿二年七月より毎月三回づつに改め、ふり山田美妙氏主として編輯に従事し、廿一年に至りて、博文館にて發行する「日本の婦人」あり、新婦人社にて發行する「新婦人」あり、女新聞社にて發行する「女新聞」あり、されども何れも中途にして廢刊せり、「婦人婦風雜誌

報」「東光」「基督教青年」「生命の道」「愛之泉」「教之友」「人間」「青年之光」「北光」「真理の鏡」「青年之手綱」「青年之魁」「天明雜誌」「愛のたより」等續々發行せられ、れども詳細の之を省略せ、佛教の雜誌にて最も古くより發行するもの「明教新誌」にして明治八年より發行し、現に三千號に垂んとす、「教義論集」の明治十六年十月第一號と發行し、中途にして暫く休刊せし、今年に至りて引續き發行するものとされり、其後に發行せしもの亦頗る多し、左に重なるもの、題號と列記せし

日宗教報、教友雜誌、反省會雜誌、第一義、四明餘霞、大同新報、密嚴教報、佛教、法教、是真宗、獅子王、淨土教報、活波瀾、法話自在錄、真誌、佛教新運動、毘婆沙、能仁新報、經世博識、大同團體、善のみちびき、共濟會雜誌、布教會報、信正誌、曹洞宗正議、道の礎、同學、大悲之友、佛教講義錄、佛教大家講義錄、佛教講話集、洞上真報、法の雨、傳道會雜誌、宗義講究會誌、法之果、異之光、積善會雜誌、芙蓉、佛教青年會誌、公之道、國之光

明治二十一年以後に至りては小説雜誌と稱するもの頻に流行せり、其重なるもの二十一年六月より發行せし「我樂多文庫」(硯友社より發行し、後に文庫と改む)、「二



十一年十月より發行せし「都の花」(金港堂發行)同年十一月より發行せし「小説萃錦」(春陽堂發行)二十一年一月より發行せし「新小説」(同好會發行)と始めとし「やまと錦」、「新著百種」、「小文學」、「小説文庫」、「聚芳十種」、「江戸紫」、「新作十二番」、「文學世界」、「小説叢書」等あり其他主として文學上の記事と掲ぐる雑誌に「日本文學」(後に國文學と改題す)「文藝」(「文藝」)「文則」、「國文」等あり

専ら醫學上の事と記載する雑誌にて「東京醫學新誌」と以て始祖とす明治十年二月廿五日第一號と發行し太田雄幸氏主として編輯と主る最初の毎月一回づつ發行せし翌年三月より三回に改め二十二年一月より毎週刊行に改む十四年七月太田氏死去するに及び松本順氏代て局長とありし其後二神寛治氏之に代り現今六百九十二號に及べり「中外醫學新報」の十三年一月より發行し二百七十號と重ぬ「醫學新聞」の田代基徳氏の編輯に係り十一年三月より發行せり其他醫學専門の雑誌に「東京醫學會雜誌」、「順天堂醫學研究會雜誌」、「成慶會月報」、「裁判醫學會雜誌」

之に與れりヘラルド新聞の記事の最も直截にして且適實あるを以て往々内國新聞の錯誤と摘發し忌憚るく之と論評し爲めに内地の輿論を喚起しるること少からず

ヘラルド新聞に請で發行しるの「ジャパンガゼット」新聞あり始めジエー、エー、アングリン氏が編輯に來るやリツカービー、ウエストウッド、シール等の諸氏と共に、ソーサ氏の發兌に係る商業新聞と買受け居留地七十番館に於て始めて「ジャパン、タイムス」と發行を今のプリント、キルビー商會の場所是なり斯くて千八百六十七年(明治元年)に至り「ジャパン、ガゼット」と合併せり「ガゼット」の之より先きジエー、ビー、エヌ、ヘグト氏發行する所に

してジエー、アール、ブラック氏専ら編輯に従事せり爾來アングリン氏の頭取より持主とあり主として之と監理せしが千八百九十九年十月に至り器械得意と始め一切機械印刷出版會社へ賣渡せり然れどもアングリン氏の依然支配者として事務と取扱ひ更にデニング氏を聘して記者とせり本年一月に至りデニング氏退社してスミス夫人之に代りしが六月八日に至りアングリン氏の病と以て逝去せり氏のアイラン

「國政醫學會雜誌」、「陸軍々醫學會雜誌」等あれども詳しくの之と略す

講義録中最も早く發行せし明治義塾法律學校、東京學館等あり何れも明治十九年より發行せり引續き、英吉利法律學校(今の法學院)にても之と發行し明治法律學校、專修學校、東京專門學校、和佛法律學校、哲學館、東京普通學校、成立學舎女子部、日本法律學校、佛學院、國語講習所、國文國史講究所、東京商業學校、振農會等前後相尋で發行す (未完)

### 第六 歐字新聞

日本に於て發行する歐字新聞中最も古くより發行するもの「ジャパンヘラルド」新聞ありヘラルドの千八百六十一年十二月廿三日横濱に於て第一號と發行し最初の毎週刊行ありしが千八百六十六年十月廿八日より毎日刊行に改めより初よりジエー、ケー、ブルック氏専ら筆と執しジエー、エツチ、ブルック氏も亦多年の間之と補助せりアイ、ワイ、ビン氏も亦一時

ドのノウエクスホードに生れ二十餘年前に我國に渡來せしが死するの時年漸く四十九才ありし

「ジャップンメール」新聞も亦「ガゼット」と同じ頃より發行しアリンクリー氏之と監理せり記事精確にして報道さる頗る迅速なれども内地の政治問題と論評するに力り時に公平と欠くの議ありし世人の一般に認むる所あり

其他神戸港にて發行する「兵庫ニュース」あり長崎港にて發行する「ライジンガサン」あり曾て東京にて發行せし「インデペンデント」あり何れも外人の手に成れる歐字新聞あり

國人の手に成れる英字新聞にて明治十九年毎日新聞社にて發行せし「英和評論新聞」と以て嚆矢と尋で吉岡商店にて「スチューデント」と稱する學術雜誌と發行し明治廿二年に至り三省堂より「國民英學新誌」と發行し「獨逸文雜誌」もまた同頃より發行せり羅馬字會より發行する「羅馬字雜誌」もまた一種の歐字新聞あり (未完)

### 第七 附錄

(西洋新聞紙の起原)新聞の起原に付ては古來歴史家の說一定せずと雖も羅馬帝國の將に隆盛の極點に達せんとするるとき則ち































こころ也ひ多くの時代をええをゆーちうき  
とみういへうなることありき

○吃の又す

わんち廿八年のまも歌あ仮存し流しう  
吃又といふ其そは文いへうのまも金海  
われうえか紋の後●そつとらへう彼の性分本  
来録も怪制うへうは書あうのまも精根を根  
けおるういへう思ひて流しう是う新し而も  
き流しうわんち久き以前二も流し其そ  
りることありふ其の釣うえうふあは  
れ行く船のいとい引吃の思ふもわんち

吃又をつとらへうこの思ふもそつとらへう  
えんといへう其の流しうをわけ或る天  
けも其の思ふもそつとらへう此男根が横着  
微着もそつとらへう思ふもその思ふもそつとらへう  
吃又うえうえうえうえうえうえうえうえう  
其の流しうはわんち十五り二丁目の市部  
序も其の思ふもそつとらへうこしう流しうの思ふ日  
浪あま思ふもそつとらへうわんち思ふもそつとらへう  
吃りしめめ其そをうつとらへう二月はうは  
考目の流しう吃りそつとらへう腹膜其を  
そつとらへう



◎後を以て此に漫録の如く記せばと  
 未だ起るゝあまの人の如く記せばと  
 を揚るゝこゝろを其の首印するに記せばと  
 し、あまの如く記せばと記せばと  
 行せし悪習を記せばと記せばと  
 此を記せばと記せばと記せばと  
 の一を記せばと記せばと記せばと  
 〇月廿二日



今死せば

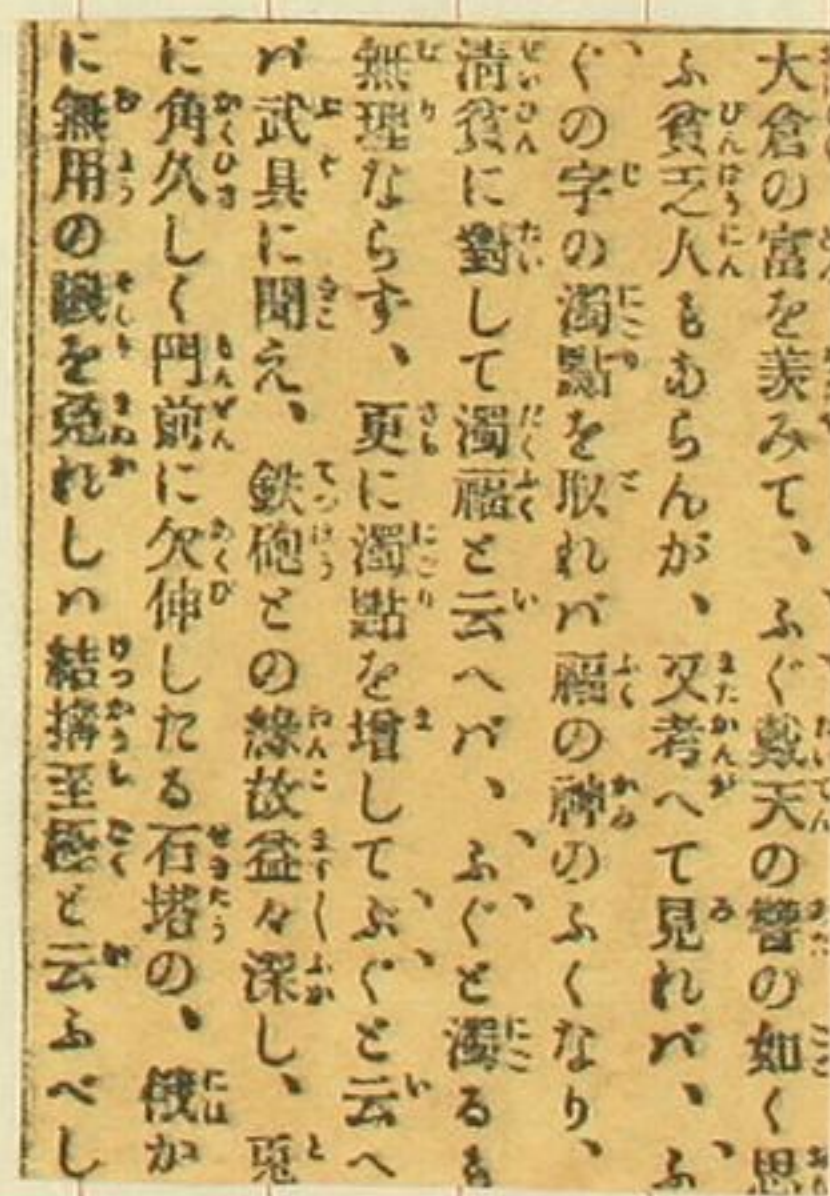
無常なる人にして、死亡の機縁修はるべきは、其  
 の人必らず長壽なるは、俗説の保証するところ、是  
 に於て乎、諸名士の長壽を祈らんが爲め、此戯文を  
 掲ぐ云爾

越後の片田舎より一貫にて飛び出したる  
 大倉喜八郎、今、赤坂葵町に宏大なる邸を  
 構へ、三井岩崎と肩を並ぶ大福長者なる  
 が轉んでも夕い起きの角兵衛獅子の本場  
 に生れたればなり、死んだ時に石碑を買ふ  
 の足元を附込まれて高價いものを買はねば  
 ならぬと、何處までも算盤づくめの男とて、  
 何時の間にやら数多の石碑を買ひ込み、門  
 前へ立て並べたるが、禍も三年立てに役  
 立つ道理、不意の事より悉く入用となりし  
 の平常の心懸に負かぬ處と覺えたり、  
 さて其由來を尋ねるに、戦争を嘗て迄みて  
 例の儲け主義、殊に鉄砲にて莫大の利益を

得たれば、一家一族打寄りて祝宴を開きし  
 が、鯛や比目魚の肴は餘り平凡にて面白  
 くない、俗に鉄砲と呼ぶ河豚こそ、其名前と  
 云ひ、其腹の膨脹れ工合、愈深き我等に似  
 たれば、是を調理して當日の肴に供せんと  
 の變つた趣向、さて愈々右の河豚鍋にて祝  
 宴を催したるに、主人喜八郎を始め妻子眷  
 属七人、石塔の敷程枕を並べて一夜の中に  
 こゝろ往生、ふくの災難と洒落どころの騒  
 ぎにあらず、早速野邊の庭を清したるが、  
 今まで門前に突立て、無用の長物よと人  
 指し諷られたる石塔、此時初めて御用に立  
 たり、さて銘り付られし文字を見れば左の  
 如し

慈深院達一方居士 俗名大倉喜八郎正六位  
 多情院時々開食大姉 俗名トキタ喜八郎妻  
 達楽院浮氣澤山信女 俗名トキタ喜八郎女  
 氣樂院野羅久羅居士 俗名トキタ喜八郎男  
 拜妻院始終閉口信士 俗名トキタ喜八郎の夫  
 才取院随分道樂信士 俗名トキタ喜八郎  
 厄介院辟通娘遊信女 俗名トキタ喜八郎女





廣く術の廣さの如け目の増進するを  
いふ了々 用いて事々 然るを揚々  
其の一蹴を云へんめ也

かん  
 の  
 玉如意の中を参り、共に  
 如く、等は、邦門にて、  
 秋、石、如く、氏、近業中、  
 草、重、の、氏、は、餘り、  
 し、友、の、邦、の、作、は、  
 千、草、の、友、邦、の、海、に、  
 千、た、友、邦、の、正、に、  
 友、邦、と、草、共に、師、を、  
 友、向、つ、完、を、求、は、少、  
 面、の、不、問、と、あ、す、者、あ、  
 々、其、中、大、作、して、又、  
 雪、の、意、の、音、作、して、章、の、  
 如、何、も、す、る、も、能、は、疾、  
 以、外、作、な、の、人、を、病、も、  
 覺、く、斯、く、

[illegible]



本號に海軍大提敵  
 艦轟沈絶快絶壯の  
 大附録を添ゆ何  
 すべし好箇紀念額面畫  
 出鱈目の記は龍溪先生  
 將來の戰局  
 夢想あり

一冊 定價 十八錢

東京京橋區晏町一番地  
 近事畫報社


(電話本局二四四八番)



改題

戰時畫報




**左の廣告を解**  
 人には**本誌**  
 得る

六ヶ**月分を進呈**  
 尤も通知先とす

通知書の名宛は本誌主任芝罘櫻田本郷  
 町國木田哲夫方とす名宛の側に解答書  
 と記すべし之を

廿二日發賣の第七號に  
 も左の廣告を掲みあり

意る者は探らず





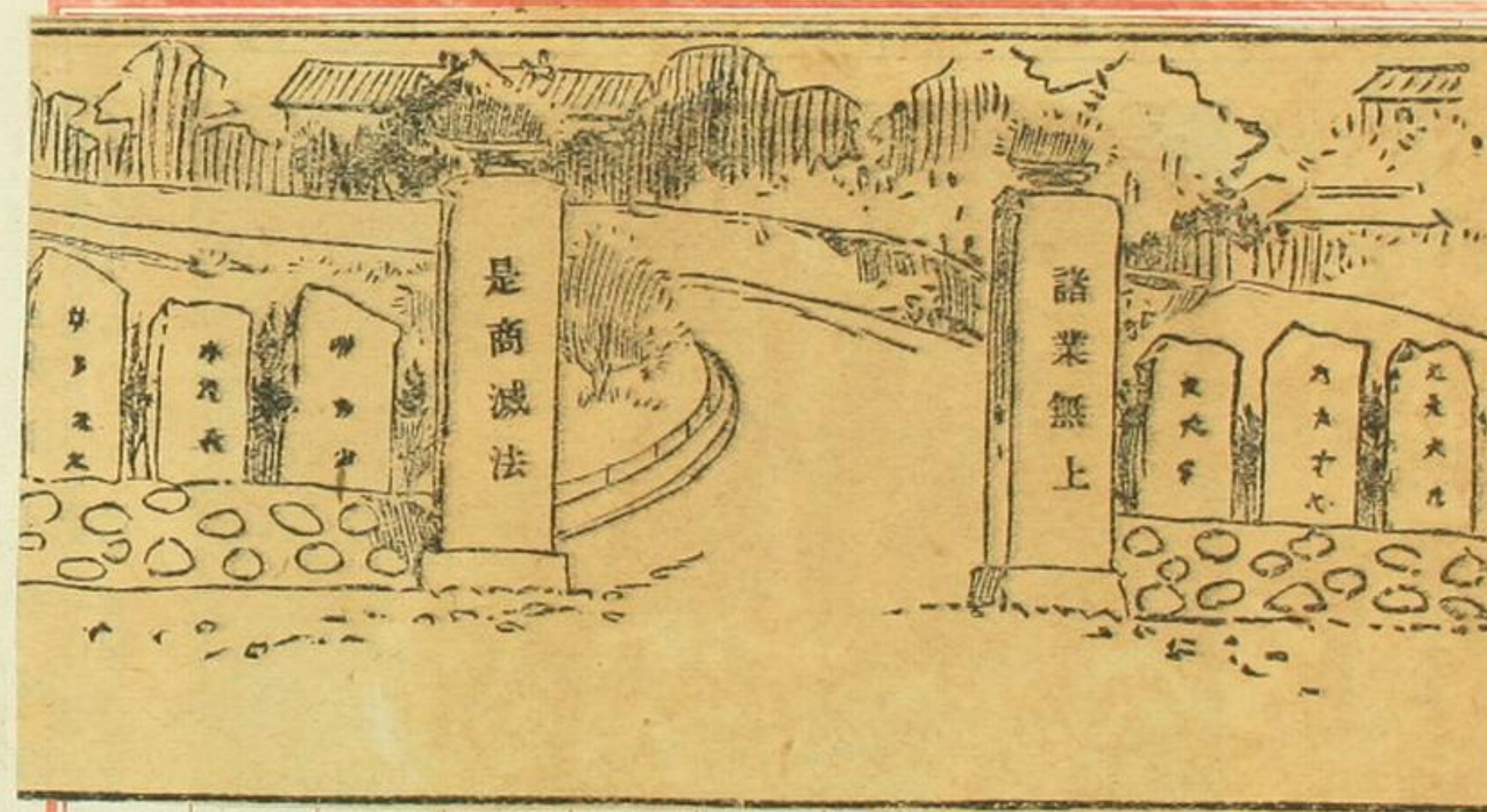





廿二日第七號發  
 每三回發行  
 畫是特種  
 派員的實寫  
 畫報と戦争記  
 實切實

● 本號に海  
燈蕚沈銘  
● 大附録  
すべき好簡紀  
● 出館目  
の記は立  
● 將來の戰局  
豫想の  
あり  
● 一冊  
定價  
● 十  
東京橋區學  
● 近事畫  
● (電話本局二四)

廣く術も廣くの如け目の増進を  
 ますすく用ひて事々然た存す  
 其の一斑を云はんのみ也

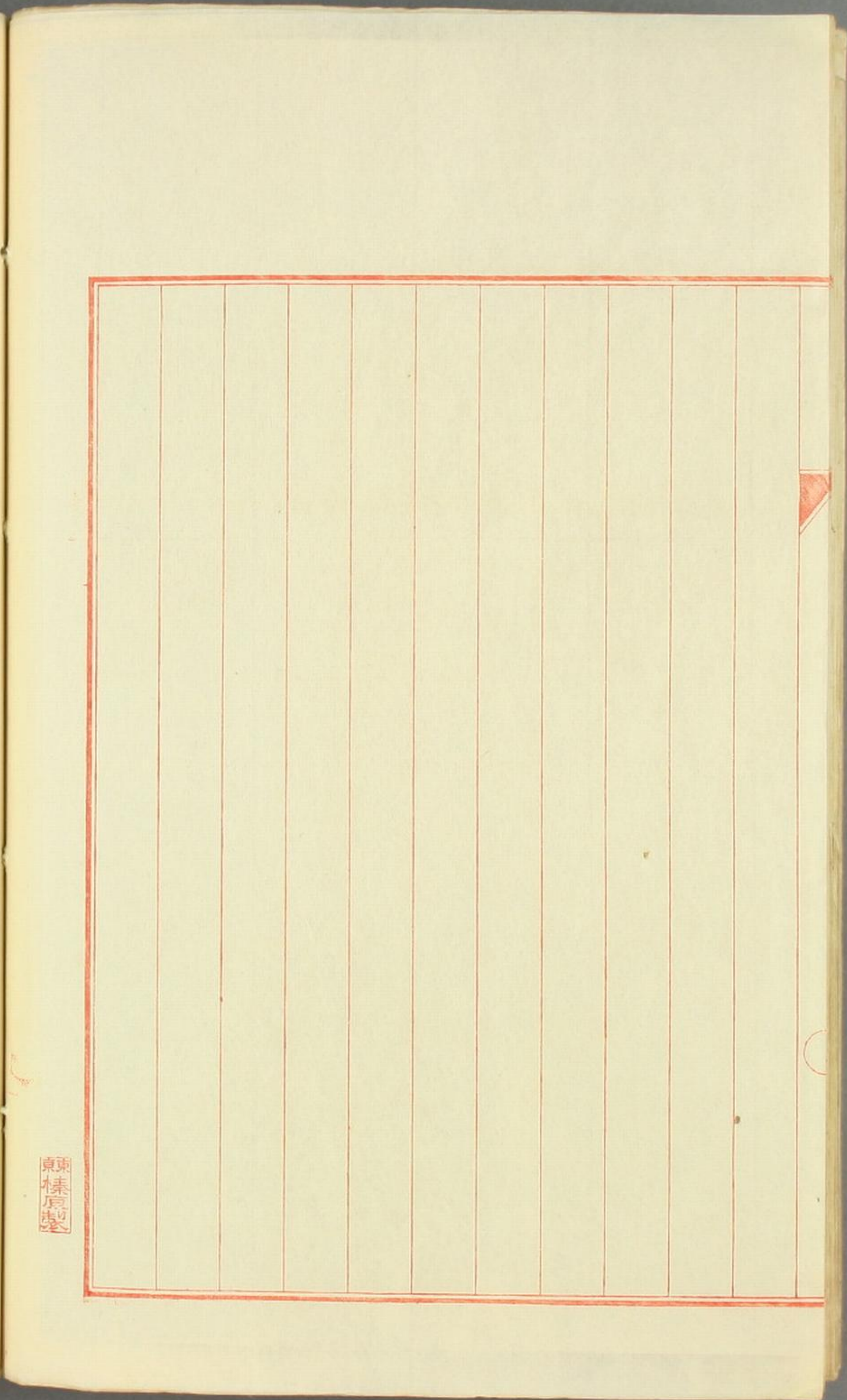
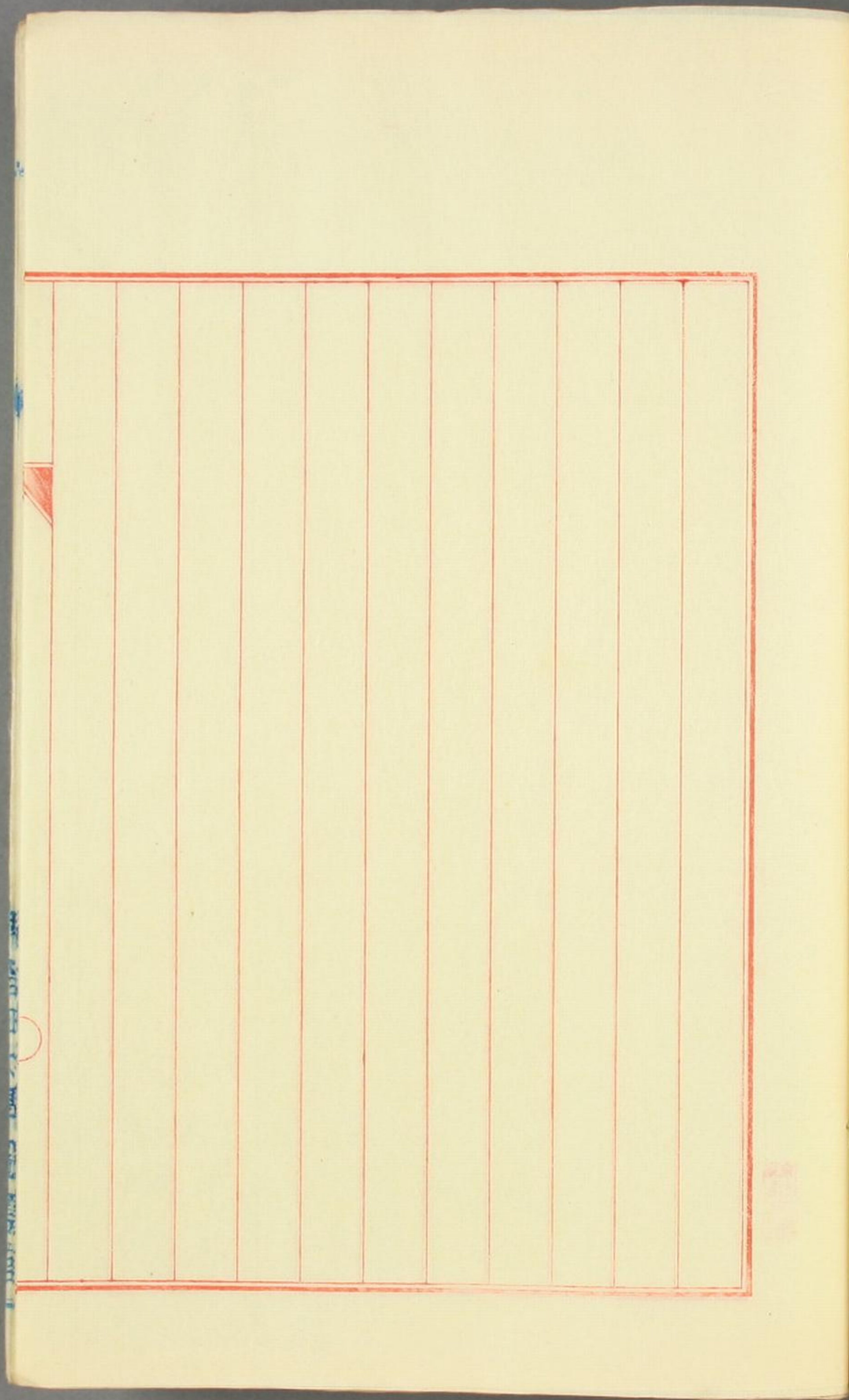


大倉おほくらの富とみを羨うらやまみて、ふぐ  
ふ貧乏ひんぱん人ひともあらんが、又  
ぐの字じの濁點じつてんを取とれ、福ふく  
清貧しやうひんに對たいして濁福じつふくと云いへ  
無理むりならず、更さらに濁點じつてんを  
バ武具ぶぐに聞きえ、鉄砲てつぱうとの  
に角久かくくしく門前もんぜんに欠伸けんしんし  
に無用むようの識しを免めんれし、結むす

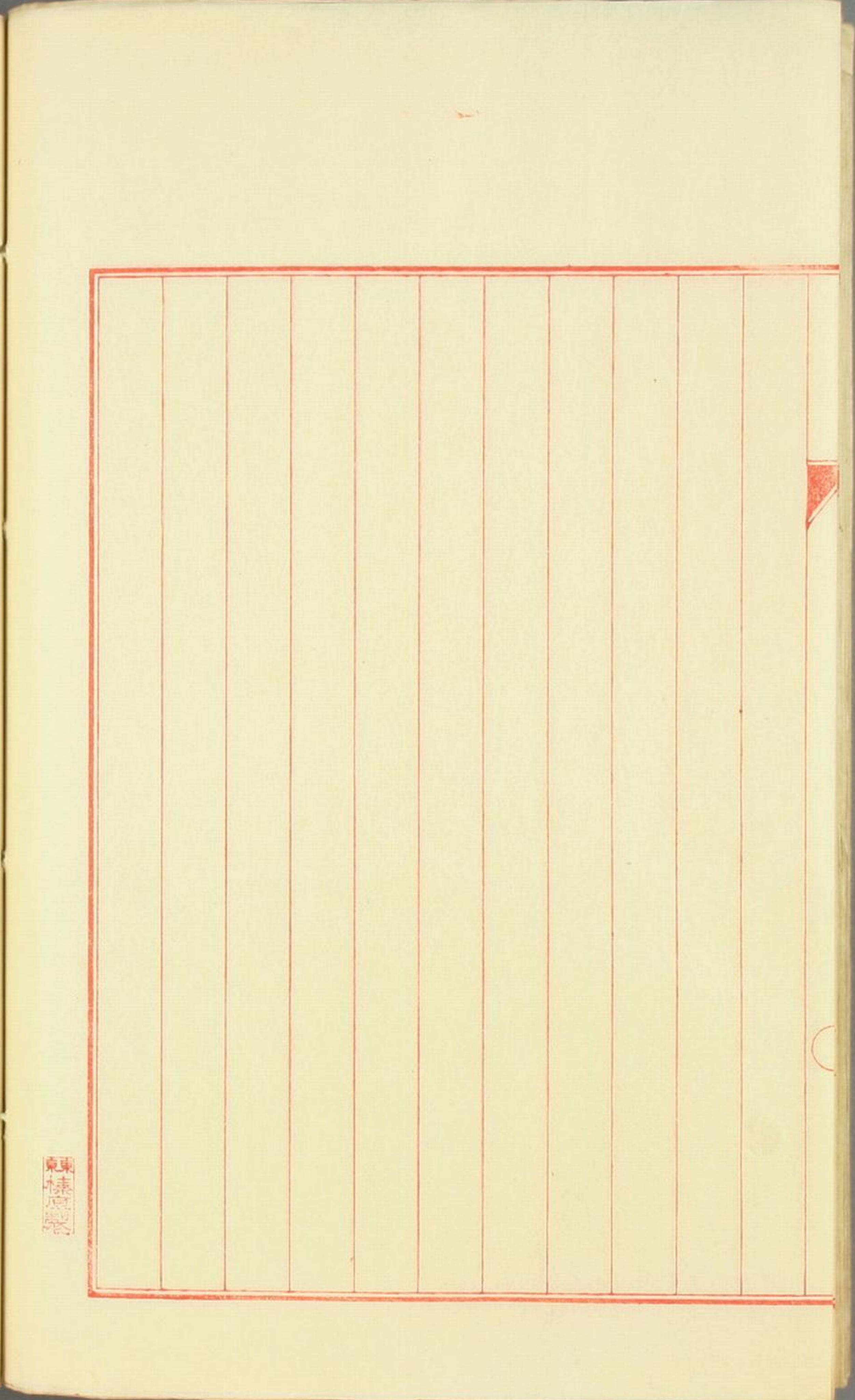
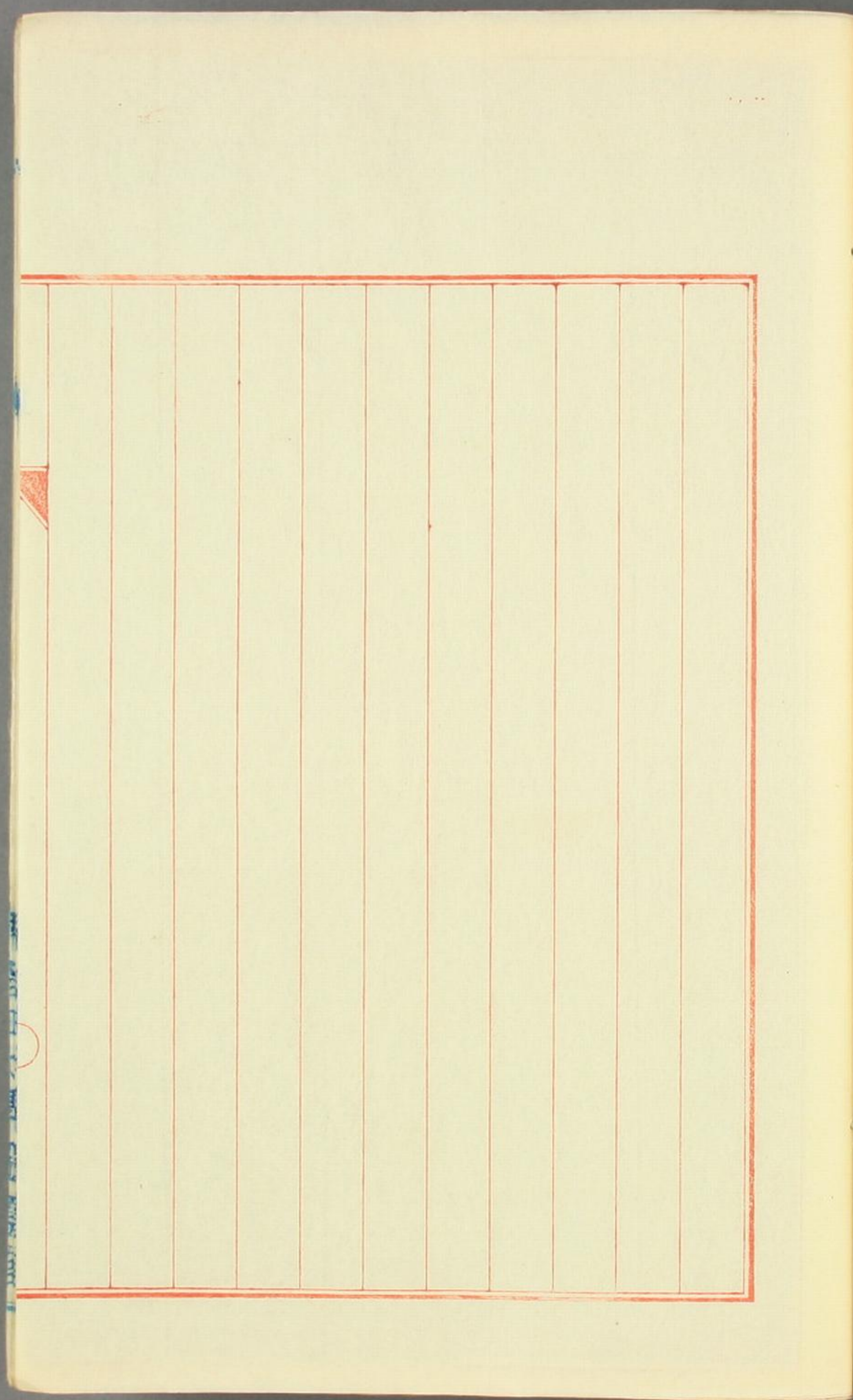














明治十六年事件記念物

一 退学余金書

一 寄附金の領を所とゆけんと  
取り放りたり子銀

一 事件の張本人奥田義人外二名  
名簿(此ゆゑに平次驥下)  
中橋氏あり中橋徳孝(あめ  
中橋とあるところ)又松崎  
徒の中より名簿を文の  
徒の中より名簿を文の

明治十六年五月五日(南校以来大出書) 退学余金書



わ

一神渡を原う程々南坂平而回

あまき橋に印の湯ありといふ  
しなもゝ穂積原をわたり記  
伝も補うしなもゝ

一明治七年車ありしはなもゝ載せたる大ま  
の記の字

いふ伝をええゝあめりかの花子  
しなもゝ三つあるゝいふゝいふゝ一年の経た  
しなもゝあめりかといふゝいふゝいふゝ

とき多きを要する資料を設けしむゝ  
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ  
ゝゝゝと謂ふゝいふゝいふゝ

一其名を二年上海う程々振起する物ありし  
の記の字

中お教字や又作元ハ川路集  
ゝゝゝ十二三ゝゝゝいふゝいふゝいふゝ  
オのゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ  
ゝゝゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

一外圓記を校の月謝受領記



んをす紙を捲くニッおーし其面  
の月海納りし紙をやく。今額の  
書き方捲きやうを載せしむる  
と毎月の月海を別記し湯を捲  
み出せること。月田中彼の出せる  
月海紙をあるの如く載せし  
我々もやんえをとおせしう、今を  
海とくひとすし、えんを以て捲  
く書の載るはてし

一 明治五年以前の南校のカレンダー

一 江戸時代出版の大版單行本及び月報日誌

の如き洋装のものも種々あること

このころの活字は概して大さきもの一丁四方

一 概覧科目表

明治初年以後の南校の行きてる概覧

の世しなものの木版を収め、その

名も別にあり





and 3000 1/2 miles from the shore











せん、夏のにしもさうば、  
のろいひてなきの露や  
おぼしめし、  
眼中しとてばとて、  
然や育ちの人るんば、  
かく、  
き、そのふししくによそこめ、  
こはやれ重なるきけと、  
んば、いつしと花の都と  
て、大津の浦とて船を乗る、  
貝津の浦

にちがつ、世田のうき、  
玉いける旅人の心を  
堂寺のいはのけし、  
は、  
とき、奥妙え川さ  
こ

巻尾余文  
最後の文

今を限りとて、  
ふる人と一目移りて、  
し、  
とくんの心を











の上まゐ 糸考うけむけうえ 五つおひ  
くせかくはうも

▲二匹のうちまれのつしゝ けうもえおんえ  
たつおひうも

(後見)



明治三十七年四  
月上浣起筆